

## 子宮がん検診（車検診）

### 動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から県の委託事業として開始され、昭和47年度より横浜市からの委託も開始された。昭和58年度からは老人保健法施行に伴い実施主体が市町村に移行し現在に至っている。なお、平成17年度から横浜市の車検診は休止している。

神奈川県予防医学協会では県下市町村からの依頼に基づき検診車を配車し、現地で問診と細胞採取を行い、協会検査センターで、細胞診断と検査成績の作成・通知・追跡管理を行っている。

精度管理向上のため、子宮がん車検診検討会ならびに報告会を行っている。「子宮がん車検診実施検討会」は、検診に協力している県下の北里大学・東海大学・横浜市立大学・聖マリアンナ医科大学・日本医科大学武蔵小杉病院の産婦人科医師、県立がんセンターの医師ならびに協会細胞診センター医師と技師で構成されている。検討会では毎年度の検診実績を検証し精度管理の維持・向上に努めている。

集計結果は県産婦人科医会役員に報告会を開催して報告し県下の子宮がん検診の普及と精度向上に寄与している。

また、車検診実施総計が200万例に達したことからこれらの実績は内外の学会にも報告し、国際的な子宮がん検診の精度向上に活用されている。

### 子宮頸がん検診結果

2007年度の車集検受診者の総数は20,117名で、昨年度の実績より1,164名増加した。本年度も受診間隔が2年に1度に変更された影響が懸念されていたが、関係各位の熱意のお陰であろう。また、検診開始年齢が20歳に引き下げられ、若年者の受診が加わったせいもある。年齢階級別では、やはり60歳代が最も多く、50歳代、30歳代の順である。期待された30歳未満の受診者は604名、3%で、昨年の4.3%を下回ったが、50歳未満の若年層の受診者は36.4%を占めていた。初診受診者率は29.7%で、昨年より0.5%下回った。うち若年者の割合は30歳未満7.9%、30歳代33.0%と高かった。細胞診クラス分類では、細胞診クラスIIIa以上の要精検者は86名(0.43%)、クラスII要再検者は62名(0.31%)だった。両者合わせた要再検・精検率は0.74%である。なお、昨年は0.63%だった。再・精検実施率は平成20年7月の時点で、86.49%、うち精検者83.72%、再検者90.32%だった。

発見癌のうち頸癌は20例（上皮内癌9例、Ia期癌2例、Ib期以上6例、病気不詳2例、腺癌1例）で、早期癌が66.7%を占めていた。頸癌発見率は0.1%（初診者では0.25%）と例年に無く高かった。年齢階級別では30歳未満では2例の上皮内癌、0.39%

（25-29歳での頻度）、30-34歳0.39%、35-39歳0.2%、45-49歳0.08%、55-59歳0.14%、65-69歳0.1%だった。初診者の多い若年者で高い頸がん発見率を示した。

発見された異形成は42例（軽度16例、中等度18例、高度8例）で、異形成発見率は0.21%である。年齢階級別では、30歳未満1.0%（25-29歳では1.17%）、30-34歳0.59%、35-39歳0.35%、40-44歳0.26%、45-49歳0.24%、50-54歳0.14%、55-59歳0.07%、60-64歳0.21%、70歳以上0.04%だった。初診者からでは、異形成の発見率は0.33%と一層高く、年齢階級別では30歳未満0.86%（25-29歳では1.02%）、30-34歳0.62%、35-39歳0.4%、40-44歳0.25%などと、若年初診者に高く、検診の必要性が再確認される。

細胞診クラスII再検は協会の特異的な分類であるが、再検受診者56名から9例（発見率0.04%）の異形成（軽度6例、中等度3例）、また0期、Ia期癌も各1例（発見率0.01%）発見されている。

例年見つけられている子宮頸癌以外の癌は、体癌も含め本年度は発見されなかった。

年度別統計では、車集検の受診者は年々減少を示していたが、本年度の受診者は僅かながら上昇傾向に転じた。恒常的になるよう期待される。本年度は異形成と共に頸癌の発見率が急上昇していた。

### 評 価

以上、本年度に実施された検診は、適正に処理される実績を示した。

平成16年から子宮がん検診が見直され、20歳以上の婦人に2年毎に実施されるシステムとなった。また、横浜市での車集検が中止された。このような変動期にあって、昨年度まで車集検の受診者が激減したが、本年度の実績は昨年度に比べ増加傾向を示した。しかし、昨年度に20歳代の受診者が初診者の中で13%を占めていたのに比べ、本年度は3%に止まった。20-30歳代の若年者では異形成や頸癌の発見率が高いところから、若年者の子宮がん検診受診が一層勧奨される。今後、若年者の子宮がん検診受診の意識が車集検を通じて涵養されること、さらには他の検診システムも含めて若年者の検診が広く普及することを期待したい。

平成19年のがん基本法が施行された。本法では、がん検診精度管理の重要性が指摘されている。本車集検での年次集計は、子宮がん検診の精度管理の先駆けとなろう。また、がん検診受診率50%の目標も掲げられた。車集検でも、一層充実した活動を行って行きたい。

関係の集計表は88頁に掲載